

巨大な「地震と津波」に加えて、3基の原子炉が炉心溶融して水素爆発。膨大な量の放射性物質が環境へ放出された。それから15年たつ。2011年3月12日に発せられた「原子力緊急事態宣言」は未だ解除されていない。

だが、2025年2月、政府が「原発回帰」の方針を決めるや、世論はその流れに掉さすようになったかに見える。

東京電力福島第一原発事故はどのように進展したのか、解明は道半ばだ。各機器や弁の不具合がどのように起きたのか、水素の発生と爆発の経緯は解明できたのか、張り巡らされた長大な配管は健全だったのか、運転者たちは、その時々にごとで何が起きたのか把握できていたのか、個々の不具合に適切に対応できたのか。システム全体は制御されなかった。

東京電力は福島第一、第二を合わせて全10基の原発を廃炉にすることを決めた。溶け落ちた核燃料デブリの取り出し、たまり続ける放射能汚染水、大気中への放射性核種の放出等々は2051年までに完了とのロードマップがある。だが、実現の見込みはない。「廃炉措置終了」とはどういう状態なのかも明らかにされていない。

原子炉から環境に放出された放射性物質による被害状況は甚大である。放射能は半減期に従って減衰するとはいえ、生命系への長期間の悪影響は避けられない。自然環境、農産物、水産物、飲料水、食品、土壌等々、未来世代への影響が深く懸念される。

低線量の被ばくなら心配ないという見方がある。しかし、放射線には、そこまでならリスクはないといえる「しきい値」は存在しない。放射線のリスクは線量に比例して増加する事実が認められているのだ。どんなに低線量であっても、DNAが損傷されると発がんにいたる危険性があることが、理論的、実験的、疫学的にも証明されている。

とりわけ成長期にある子どもたちには、注意を払わなければならない。福島事故は子どもたちに甲状腺がんを多発させた。福島事故で陸地に広範に飛散した放射性物質は子どもたちの日常の活動範囲を汚染した。「いわきの初期被曝を追及するママの会」の真摯な活動は貴重な記録である。

あらためて、東京電力福島第一原発の過酷事故を問いたいと思う。

原子力資料情報室 共同代表 山口幸夫